

# 模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年12月12日)

授業者：〇〇

範囲：少子高齢化と財政

## 主な感想・代案

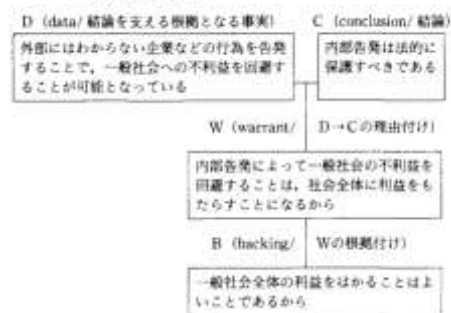
- 資料選びや授業構成に配慮していることが伝わってきます。また、高齢者グループと若者グループを作るなど、社会保障政策をめぐる、複数の視点から考えさせ、揺さぶろうとしていることが伝わってきます。全体がうまく機能したかは置いておいても、色々と考えた形跡はすごく感じます。
  - 少子高齢化の問題は、現実の日本が直面している難問です。だれもが良くないと分かりつつも、どうやって解決すればよいのかが分からず困っている。そういった深刻なテーマです。ある意味で逃げ場がなく、話せば話すほど、暗くなっていきかねないテーマと言ってもいい。
  - そういった内容を中学生の授業で扱う際、私たちはこのテーマとどう向き合えばよいのでしょうか？現実には非常に混沌としているがゆえに、高福祉高負担、低福祉低負担の二極化した主張に簡単にまとめ、そのいずれかを選ばせるために議論するという発想は、この問題を多面的多角的に分析する上では良い方法だと思います。ただ、この問題が非常に根深い問題であるという自覚が必要です。
  - そう考えた時、私は、問題の解決や対話をするプロセスよりも、なぜ意見が対立してしまうのかを複数の視点から学べる時間、もっと具体的に言えば、論点对立を可視化できるような事実情報をもっとたくさん生徒に示してもよいのではないかと思います。〇〇君の授業では、高齢者と若者の意見の考えがフワフワッと示されていましたが、客観的な事実情報の例示は少なかったように思います。介護保険制度のことを示していないという点とも重なります。
- 子育て、社会保険、介護 etc などに関わる、いくつかの事実情報を示してしまい、参考情報とするというのはありだろうと感じます。これまでの復習的な内容が含まれてもいいし、まだ教え切れていない部分をカバーするという意味でも、参考情報程度にあると良い気がします。
- これは私の好みにすぎない部分もありますが、「どのようにすべきだろうか？」を生徒に問う手前で、「なぜ意見の対立が起こってしまうのだろうか？」と、議論を分析させる場面があると良いように思います。解決困難な問題であるがゆえに、このプロセスがとても大切になってくるのではないかと。高齢者と若者がどういった価値を重視する傾向にあるのかを簡単に整理し、その上でどうすべきかを議論していく方が、「わかんねー」と単にならないために良いような気がします。

## 【コラム】理論と実践の接点

「不都合の合意」という言葉があります。お互いが何に合意できているのか、何に基づいて、その主張をしているのかといったことについて、注目すること、どこまでなら歩み寄れるかを考えることをこそ重要だという考え方です。

そういう場合に議論の枠組みを分析する手法として「トゥールミン図式」というモデルが提案されています。この図式においては、主張は「データ」（結論を導くための証拠の部分）と「理由付け」（データから結論への結びつきの妥当性を表すもの）に基づいて作られます。こういった図式を使うことで、生徒の価値観を問い直していく方法はあるかもしれません。たとえば、吉村（2003）でも、企業の内部告発をめぐる、異なった根拠づけとデータに基づけば、異なる主張になることを示しています。こういった分析を生徒が行うことで、自分自身が重視している価値が浮き彫りになるかもしれないなと思いました。

【別掲】：内部告発を法的に保護することに賛成する側の論理構造：検証前]



【参考文献】吉村功太郎(2003)「社会的合意形成能力の育成をめざす社会科授業」『社会科研究』第59号。